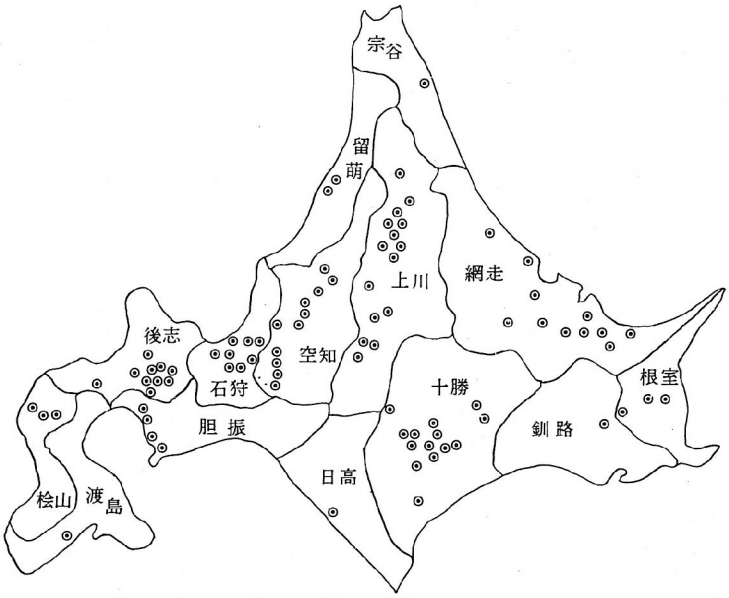
第4章 亜麻産業の盛衰※

琴似亜麻工場と同じように亜麻のくきからせんいを取り出す仕事をする工場は、北海道内の各地に建てられました。その数は、合計で 85 か所にもなりました。北海道のすずしい気候にあった亜麻を育て、収かくされたくきからせんいを取り出して糸や布製品を作る仕事は、北海道の重要な産業となっていたのです。

▼北海道内に建てられた亜麻工場の位置を示した地図



（出典）原松次著「北海道における亜麻事業の歴史」6頁

ところが、琴似亜麻工場は 1957（昭和 32）年 10 月に閉鎖され 66 年の歴史を閉じます。そして、北海道内の各地に建てられた亜麻工場は、1970（昭和 45）年に最後まで残っていた十勝地方の音更工場が閉鎖され、すべて無くなってしまいました。

北海道でさかんになった亜麻産業が、無くなってしまったのはなぜでしょうか。

むずかしいことば

※盛衰　ものごとのいきおいがさかんになることと、おとろえること。

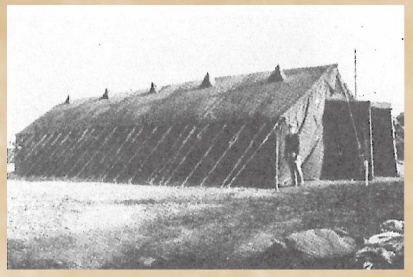
※軍服　軍人が着る制服。

【終戦と亜麻産業】

亜麻のせんいをもとに作られる織物（布）は、丈夫で長持ちする性質があります。丈夫なので、軍服※やテントなどを作るのにとても便利でした。明治時代に北海道で亜麻産業が始まってから、日本は大きな戦争を繰り返しました。そこで、戦争で使う軍服やテントなどの布製品を作るために、たくさんの亜麻を育て、たくさんの亜麻のせんいが必要だったのです。

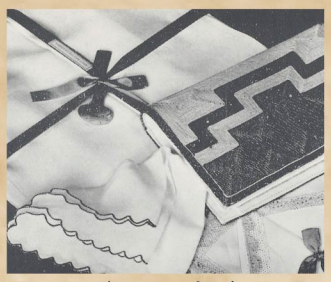
しかし、1945（昭和 20）年に戦争に敗れた日本は、平和な国づくりを進めることになりました。戦争後、日本は食料不足になったため、国は、食料になる農作物を育てることを優先することにしました。そのため、亜麻を栽培する農家は少なくなっていき、北海道内の亜麻工場は、原料となる亜麻のくきを十分に確保することが難しくなっていきました。

亜麻のせんいで作られた製品のいろいろ


▲テント

▲消火用ホース

▲衣服（リネン服）


▲ハンカチ

（出典）テント：美幌町役場「美幌の亜麻工場」171 頁、消火用ホース・ハンカチ：帝国製麻株式会社「日本の製麻業」28 頁以下、衣服：帝国製麻株式会社「帝国製麻株式会社三十年史」巻頭頁

【化学せんいの登場と亜麻産業】

1945（昭和 20）年の終戦とともに、亜麻産業に関わる仕事をしていた人たちは、これからは人々の平和な生活に役立つ製品を作ろうと決めました。ところが、その後、糸や布製品の原料となるせんいとして、石油などを原料として人工的に作られる化学せんいが急速に広まりました。化学せんいは、亜麻のせんいと比べて価格が安く、亜麻のせんいが使われていた消火用ホースなどでも化学せんいが使われるようになり、亜麻のせんいが必要とされることは少なくなっていきました。

亜麻を栽培する農家が少なくなって、原料となる亜麻のくきを確保することが難しくなったことと、化学せんいが広まってきたことが重なって、亜麻産業に関わる仕事を続けることが難しくなってしまったのです。

リネンの歴史と文化

亜麻のせんいは、人類が織物の原料として利用したもっとも古いせんいといわれており、古代エジプトでミイラを包んだ布にも亜麻のせんいが使われています。

世界に目を向けると、亜麻は今も多くの国々で栽培されています。

▲古代エジプトの壁画にえがかれた亜麻の収かくの様子
（出典）「帝国製麻株式会社三十年史」207 頁

ヨーロッパでは、亜麻のせんいを原料に作られた布製品（英語では「リネン」といいます）は、すぐれた性質がある織物として人々の生活に取り入れられ、文化として受けつがれています。肌触りがよく、水をよく吸収して乾きやすい性質があり、洗たくにも強い丈夫さが人々に支持されている理由で、特にシーツやバスタオル、テーブルクロスなどの材料として人気があります。